

動詞 threaten の繰り上げ動詞用法への通時的変化とその統語派生について

笠井 俊宏

1. 序

生成文法理論の枠組みにおいて、動詞 threaten は一般にコントロール動詞として分析される。Traugott (1997) によると、threaten は元々コントロール動詞としての用法を持っていたが、主観化による意味変化の結果(1)に示すイディオムの一部が主語位置に生起する繰り上げ動詞用法も持つようになった。

- (1) But if push ever did threaten to come to shove, British and French nuclear weapons ...
(1992 Economist [Hector] / Traugott (1997: 189))

Traugott (1997)では、動詞 promise にもコントロール動詞用法から繰り上げ動詞用法を持つ変化を観察しているが、両動詞ともその補部に着目して分析している。本稿では、歴史コーパスを使用した結果、その観察がやや不明瞭であると主張し、同じく Traugott (1997)で述べられている構造の曖昧性によりコントロール用法から繰り上げ動詞用法へと拡張すると提案する。その様に考えると両者の間には密接な関係があると思われるが、両者を結び付けて考えている Hornstein (1999)のコントロールの移動分析を基に threaten の統語派生を考えることで、その分析が Roberts and Rossou (2003)でも主張されている経済性の原理とも合致することを主張する。

2. 先行研究 : Traugott (1997)

この節では、先行研究として Traugott (1997)を概観する。Traugott は threaten の認識的意味の発達を3段階に分けてその変化を観察している。まず、段階 I の古英語期では、threaten は現在と同じく何かマイナスのことを与える意図を示すためコントロール用法であったと主張している。段階 II の16世紀には、「予兆、前兆」の意味を発達させ、無生物主語の両方を取ることが可能であったと主張している。18世紀の段階 III の時期では、不定詞節を伴う繰り上げ動詞用法を発達させたとして主張している。また、この時期の初期段階では、不定詞節の動詞には diminish のような状態変化動詞であったのに対し、promise に関しては動詞 be を伴う起動相の出来事に限られていたことを観察している。このことに関して Traugott は、主語は動詞 be と何らかの θ 関係を持ち、Dowty (1985), Higgins (1990), Langacker (1995)における完全主題関係から非主題関係への移行段階であると言及していたが、threaten には動詞 be を伴う事例が観察されていなかった。最後に、threaten が何故上記のような変化を起こしたのかに関しては、段階 I の時期に threaten によって意味される未来性の推論が関係し、直接目的語がその未来性を示せるようになったことにより、段階 II において新しい認識的意味と元々持つコントロール用法の意味を共存するようになったことが提案されている。また、補部を取る直接目的語は不定の目的語であることが多く見られ、この不定の目的語が commitment の意味を下げる要因になったと考えられている。

3. データと分析

まず、歴史コーパス YCOE, PPCME2, PPCEME, PPCMBE を使用し threaten のコーパス調査結果を示す。その際、以下で示すように収集した用例の主語が有生か無生物かによって分類したが、それは無生物主語が threaten の外項として動作主にはならないため、繰り上げ用法の出現を示す証拠となるためである。

Table 1: Tokens of *threaten* with animate subjects

| | O1 | O2 | O3 | O4 | M1 | M2 | M3 | M4 | E1 | E2 | E3 | L1 | L2 | L3 |
|---------------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| <i>threaten</i> DO (indefinite) | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 3 | 1 | 0 | 0 |
| <i>threaten</i> DO (definite) | 0 | 1 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | 1 | 0 | 4 |
| <i>threaten to</i> infinitive | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 3 | 4 | 7 | 4 | 3 | 8 |

Table 2: Tokens of *threaten* with inanimate subjects

| | O1 | O2 | O3 | O4 | M1 | M2 | M3 | M4 | E1 | E2 | E3 | L1 | L2 | L3 |
|---------------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| <i>threaten</i> DO (indefinite) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 2 | 0 |
| <i>threaten</i> DO (definite) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 4 | 3 | 1 |
| <i>threaten to</i> infinitive | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 2 |

O1 (-850), O2 (850-950), O3 (950-1050), O4 (1050-1150), M1 (1150-1250), M2 (1250-1350), M3 (1350-1420), M4 (1420-1500), E1 (1500-1570), E2 (1570-1640), E3 (1640-1710), L1 (1710-1770), L2 (1770-1840), L3 (1840-1914).

表より、各時期を通じて定・不定の目的語を同様に取ることが観察できるため、前節での定性の違いによって commitment の意味を下げるという提案はどの程度の数があれば実証できるかやや不明瞭であることが分かつ

た。また、有生主語を伴う to 不定詞節の例は M1 の時期に初出例が観察されたため、(2)にその実例を示す。

- (2) ... for he dude him seolf bitwenen us & his fader þe þratte us for to smiten ...
... for he did himself between us & his father that threatened us for to fight ...
'he did himself between us and his father who threatened to fight us ...'
(CMANCRIW-2,II.270.403: M1)

また、Early English Books Online を用いた所、(3)に示す起動相の出来事の不定詞節を伴う例が観察された。

- (3) ... while the vulgar threaten to be their Oppressours, ... (EEBO 1661)

前節における起動相の出来事の不定詞節がコントロール動詞用法か繰り上げ動詞用法かの曖昧性が生じる提案を踏まえると、初期近代英語期の E3 の時期には構造の曖昧性が生じ、その結果徐々に繰り上げ動詞用法へと拡張することが予想される。すると、初期近代英語期の E3 を皮切りに、表 2 に示す無生物主語を伴う to 不定詞が観察されることが分かった。現代英語においては、Oxford English Dictionary Online を用いると 'to appear likely to do some evil' の意味を示す天候の it を伴う(4)の例が L3 の時期において観察される。

- (4) It threatens to be wet to-night.(1846 C. Dickens Dombey & Son (1848) iv. 25: OED online)

以上の観察を基に、threaten の統語派生について考察する。これまでの観察を踏まえると、元々コントロール動詞用法を持つ threaten が繰り上げ動詞用法も持つようになることが観察されるため、両者の間にはかなり密接な関係があるように思われる。そして、その関係は(5)で示す Hornstein (1999)等で提唱されているコントロールの移動分析の観点から捉えることができると考える。

- (5) [IP John [VP John [hopes [IP John to [VP John leave]]]]] (cf. Hornstein (1999: 79))

(5)では、コントロール構文も繰り上げ構文同様移動分析で捉えているため、不定詞節の外項として基底生成された主語 John は leave の θ 素性を照合し、不定詞節の EPP 素性を満たすために IP 指定部を経由して主節の外項位置で主節の述語 hope の θ 素性を満たした後、主節の IP 指定部に移動し、そこで主格を得ると分析されている。この分析を踏まえ、(2-4)の事例における threaten の構造変化とその派生を(6)のように考える。

- (6) a. [TP who_i [VP t_i threatened_[θF] [TP t_i to [VP t_i fight_[θF] us]]]]
b. [TP the vulgar_i [VP t_i threaten_[θF] [TP t_i to [VP t_i be_[θF] their Oppressours...]]]]
b'. [TP the vulgar_i [VP threaten [TP t_i to [VP t_i be_[θF] their Oppressours...]]]]
c. [TP It_i [VP threatens [TP t_i to [VP t_i be_[θF] wet to-night]]]]

注目すべき点は(6b)で示す初期近代英語期において、コントロール構造から繰り上げ構造へと変わる途中段階として統語構造に曖昧性が生じるようになることである。(6b)が完全主題関係であるコントロール動詞の構造であり、(6b')曖昧性が生じた繰り上げ動詞の構造である。この構造においては、threaten の意味は希薄化しており、主題役割としての θ 素性も無い状態で派生が収束する。最終的には(6c)で示す繰り上げ構造へと変化するが、この変化は(7)で示す Roberts and Roussou (2003)でも主張されている経済性の原理とも一致する。

- (7) A structural representation R for a substring of input text S is simpler than an alternative representation R' iff R contains fewer formal feature syncretisms than R'.

(Roberts and Roussou (2003: 201))

主要参考文献

Hornstein, Norbert (1999) "Movement and Control," *Linguistic Inquiry* 30, 69-96./ Roberts, Ian and Roussou, Anna (2003) *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*, Cambridge University Press, Cambridge./ Traugott, Elizabeth C. (1997) "Subjectification and the Development of Epistemic Meaning: the Case of *Promise* and *Threaten*," *Modality in Germanic Languages: Historical and Comparative Perspectives* ed. by Swan, Toril and Westvik, Olaf J, 185-210, Mouton de Gruyter, Berlin.

コーパス

Davies, Mark. (2017) *Early English Books Online Corpus*. Available online at <https://www.english-corpora.org/eebo/>
Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia./ Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Ariel Diertani (2010) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Modern British English* (PPCMBE), University of Pennsylvania, Philadelphia./ Kroch, Anthony and Ann, Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second Edition (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia./ Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk, and Frank Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), University of York, York.

辞書

The Oxford English Dictionary Online (OED Online), Oxford University Press, Oxford.